

## マリオン M. スコットと日本の教育

古賀 徹  
(日本大学大学院)

### 1. はじめに

マリオン M. スコット (Marion McCarrell Scott, 1843-1922) は、1871 (明治4) 年から1881 (明治14) 年までの約10年間、わが国においてお雇い外国人教師として活動したアメリカ人である。特に東京に設立された官立師範学校最初の教師として、日本に教員養成法及び近代教授方法を最初に導入した人物として知られている。

師範学校の設立趣旨によれば、外国の制度を模倣して設置され、外国人教師により外国の教育方法・内容に従って小学校教員を養成し、また小学教則を編成することを目的としていた。<sup>(1)</sup> この外国人教師にスコットが選出されたことによって、<sup>(2)</sup> その本国であるアメリカ合衆国の教育方法・内容に範を置き、教員養成がおこなわれるようになる。また彼を通して従前の近世教育とは異なる、近代教育の方法が米国よりもたらされた。

ここで、この近代的教育の方法として期待された、スコットの教授 (カリフォルニアを中心としたアメリカ合衆国の教育方法・内容) の実質に注目したい。

従来、スコットが日本でおこなった教育の実態について明らかにしうる資料が極めて乏しいために、その具体的な研究は不十分であった。もっとも、彼の伝えた教授法分野に関しては、教授法書等を主として扱った研究がいくつかあり、<sup>(3)</sup> 教育内容についても、スコット影響下と目される師範学校附属小学教則は、その下等小学の分については、ほぼアメリカ合衆国の教則の翻案であると指摘されている。<sup>(4)</sup>

スコットの教授の実質を実証的に解明するためには、これらの教授法書及び小学教則の内容を分析し、また相互の影響関係を考察する必要がある。本稿では、アメリカ合衆国の教則「亜米利加合衆国プライメリースクール教則」・「亜米利加合衆国プライメリー グランマル学校教則」<sup>(5)</sup> 及び *Rules and Regulations of the Public Schools of the City and County of San Francisco*, 1871<sup>(6)</sup> をとりあげ、師範学校附属小学教則と比較してその影響を明らかにしながら、教授法書とも比較対照することにより、スコットが日本でおこなった

教授方法及び教育内容の実質について考察してみたい。

## 2. 師範学校における授業

師範学校におけるスコットの指導の実際について記録された資料はなく、今日これを詳細に知ることはできないが、通弁官であった坪井玄道や文部権大書記官であった辻新次らが後年に残した回想録からその状況を推察することができるであろう。

創業当時のエピソードとしてあげられるのは、「学科授業法は勿論、何でも洋風に机と腰掛で授業をするのでなければいけないといふので、わざわざ昌平校の畳を剥がして、穴だらけになった板の間を教場に用ゐた」<sup>(7)</sup>ことであり、「スコットの命ずる通りの黒板をこしらへ、それから教師が教鞭を持（中略）此方の流儀でなく、彼の国の事をそっくり取ってやる」ということであった。このように従前の教育（寺子屋・藩校など）とは、教育形態（教室・教具・方法など）を異にするアメリカ合衆国方式へと変えられていった。スコット自身、後年記した小論文“Education in Japan”の中で、「（日本の）教育方法や教具類は全て変えられ、教科書・教具・掛図類は新しく作られ、あるいは日本人の要望にたえるよう翻訳された。（中略）我々（アメリカ合衆国）の方式に従って変えられていった」<sup>(8)</sup>と語っている。また、その授業方式としては当初の計画通りに一種の助教制度（モニトリアル・システム）が用いられていた。そして、この師範学校でスコットに指導を受けた者、卒業生たちが各地へ伝播することにより近代教授方法が徐々に普及していくのである。

## 3. 教授方法

前述のような直接的伝承方法だけでなく、それに加えて間接的な、教授法書を通しての普及が大きな役割を果たしていた。東京や各府県の師範学校関係者たちによって著された初期の教授法書の内容は、スコットの伝えた方法に基づくものであり、ここでその内容について検討する必要がある。

初期の代表的な教授法書としてあげられる、当時の師範学校長諸葛信澄の『小学教師必携』緒言には、「小児ノ教育ハ、學術ヲ授クルニアリト雖モ、始メハ勉メテ、小児ノ感受力ヲ挑発シ、智力ヲ培養スルヲ以テ、第一トス、蓋シ智力ヲ培養スルハ、万物ニ就テ、其性質ヲ考究シ、用法ヲ思慮セシムルニアリ、就中、小児ハ、感覚鋭敏、思考迅速ニシテ、万物ニ遷リ易キモノナレバ、宜シク、此期ヲ過ルコトナカルベシ」<sup>(10)</sup>とあり、実物教授また開発教授の考えを示している。ただ必ずしも実物を教材として用うべきことを強調しておらず、掛図類を用いて授業を進めることとした。また多くの教授法書は、この諸葛の著作に従って書かれている。

スコットが伝えた教授法が実物教授 (object teaching) の方法であったことをより一層示す例が、金子尚政訳による『小学授業必携』である。序文に、「此書原本ハ千八百七十一年鐵板米人何爾京氏著ス所ノ『ニュープライメリーオブジェクトレススン』(物体教授ト訳ス) 題セル泰西小学授業ノ方法ヲ載スル書ニシテ東京師範学校ノ創業ニ際シ此書ヲ以テ授業ノ範則ト為セリ<sup>(11)</sup>」とあり、アメリカ合衆国で当時台頭していたオブジェクト・レッスンがもたらされたのである。

また全教科の教授法の基本となっているのが、掛図あるいは実物を用いて教師と生徒とで問答をするという授業であり、当時の教授法書には例外なく「問答」の教授例が示されている。前掲諸葛『小学教師必携』から下等小学第8級の問答科教授例をあげると、「柿ト云フ物ハ、如何ナル物ナリヤ、○柿ノ木ニ熟スル実ナリ、」「何ノ用タル物ナリヤ、○果物ノ一種ニシテ、食物トナルナリ、」「如何ニシテ食スルヤ、○多ク生ニテ食シ、稀ニハ、乾シテ食スルモノナリ<sup>(12)</sup>」というように問と答とがワンセットの文章となった分解発問である。そして生徒からの問いではなく、教師から問い、あらかじめ統一された答えを復唱させ、記憶させる方法であった。問答の目的は、「智力ヲ、培養スルノ基<sup>(13)</sup>」とされてはいたが、その開発的意味よりもむしろ知識の蓄積(暗唱)と理解されている。しかしそれは日本に近代教授が導入される過程において、スコットによって暗記注入に変えられたのではなく、当時のアメリカ合衆国の現状が、まさに授業イコール記憶(recitation)であるとされていたのである。

#### 4. 教科, 教育内容

すでに述べたように、師範学校の目的は単なる教員養成のみではなく、近代教授法の伝習とともに小学教則を制定することにあつた。当然その教則には近代的教授法がもり込まれることになる。

スコット指導下の1873(明治6)年2月に師範学校附属下等小学教則が創定され、そして同年5月に改正下等小学教則及び上等小学教則が制定された。下等小学教則の2つには、多少教科の進み具合が違うほかはその内容に大差はない。また師範学校附属小学校は1873(明治6)年4月開校であるから、そこでの実践に基づいて制定されたのではなかった。それは前述のように、当時の実情を考えたというよりも、ほとんどそのままアメリカ合衆国の教則を訳して当てはめたものと思われるからである。その原本は学習院大学図書館所蔵の「亜米利加合衆国プライメリースクール教則」と、「亜米利加合衆国プライメリー グランマル学校教則」であると思われるが、スコットがいたサンフランシスコの小学教則である可能性が高い。

ここで、師範学校附属小学教則（2月創定教則及び5月改正教則の二等8級分）と上記のアメリカ合衆国版と目される教則とを比較対照してみよう。なお、以後教則名を次のように略記する。明治6年2月創定師範学校附属小学教則を「創定小学教則」、明治6年5月改正のものを「改正小学教則」、2つに特に差がない時に総称として「師範小学教則」。「亜米利加合衆国プライメリースクール教則」を「PS教則」、「亜米利加合衆国プライメリーグランマル学校教則」を「PG学校教則」。そして *Rules and Regulations of the Public Schools of the City and County of San Francisco*, 1871 を「SF小学教則」。

さらに、「SF小学教則」は「PG学校教則」の原本であるから、共通している部分は「PG学校教則」のみをあげておく。誤訳あるいは違いのある部分では、あらためて「SF小学教則」を示すこととする。

まず全体の教科配列をみると、「師範小学教則」では二等第8級から1級まで、読物、算術、習字、書取（「改正小学教則」は5級から作文）、問答、復読（1級は諸科復習）、体操、が教科目としてあげられている。

「PS教則」では第4ノ分から（第8級から5級に対応する）、綴字、読方、書取、石版習字（習字）、算術、進退、問答、字韻、体操、3級から図法、音楽が加わっている。

「PG学校教則」第8級からは、算術、読方綴字、習字（6級から文法）、問答（6級まで）、音楽、6級から地学、3級から語解、2級から史学、1級に日記、と以上のような配列となっている。「SF小学教則」と教科配列が同一である。

主要教科については、読方綴字が読物となり、あとは算術、習字、書取、問答、とほぼそのままとりいれられている。削除された教科や内容については後述する。

次に各教則の二等小学第8級分をあげる。「師範小学教則」については、表1を参照。<sup>(15)</sup>

〈表1〉

明治6年2月創定下等小学教則		明治6年5月改正下等小学教則
第 八 級		
読物	五十音図ト濁音図ニテ仮名ノ音及ヒ呼法ヲ教ヘ単語図第一ヨリ第八マデヲ以テ単語ノ読方ト名物ヲ教ヘ或ハ兼テ小学読本巻ノ第一二回ヲ授ク	（ほぼ同じ） 単語図第一ヨリ第八マデト連語図第一ヨリ第八迄ヲ教ヘ……が加わっている。
算術	数字図ト算用数字図ヲ以テ数字ノ読方ト一ヨリ百マデノ書キ方位取り並ニ算盤ニテ物数ノ数ヘ方ヲ教ヘ加算九九ヲ誦読セシム	（ほぼ同じ）

習 字	習字図ヲ以テ盤上ヘ片仮名ノ字形ヲ記 シ運筆ヲ数ヘテ石盤ヘ習ハシメ習字本 ニテ平仮名ヲ教ヘ筆ノ持チ方ヲ教フ	石盤ニテ片仮名ノ字形ヲ教ヘ次ニ習字 本ニテ仮名ヲ教ヘ筆ノ持チ方ヲ教フ (内容はほぼ同じ)
書 取	五十音並ニ単語ノ文字ヲ仮名ニ綴ラシ ム	(ほぼ同じ)
問 答	単語図ヲ用キ食物ノ類ハ其味ヒ及ヒ食 シ方器財ハ組立テタル物質及ヒ用キ方 等ヲ問答ス	単語図ヲ用キテ諸物ノ性質及用キ方等 ヲ問答ス
復 読	／	／
体 操	／	体操図ニ依テ授ク 以下之ニ倣フ

○「P S 教則」

〈綴字〉、〈読方〉

牌 (カアヅ) 自一至八 ウィルソンス プライメリスパルレル初篇廿章マデ  
ウィルソンス懸図自一至六 ウィルソンス プライメル

〈算術〉

自一至百算 自一至十二羅馬数字位取 自一至十加算 九々呼法自一至六

〈石版習字〉

エビシ 教 綴字

〈書取〉

ウィルソン懸図自四至六

〈問答〉

通常物 指示部分及物質懸図自一至二 顔色 正色七 第十三ノ懸図

〈体操〉

(〈字韻〉と〈進退〉は略する。)<sup>(16)</sup>

○「P G 学校教則」

〈読方・綴字〉

ウィルソンス懸図 ウィルソンス第一リードル

〈算術〉

自一至十加算 由数記説 羅馬数字

〈習字〉

草書 簡易頭文字

〈問答〉

五感 機関 通常物 家畜物 正色 間色

〈音楽〉は略する。<sup>(17)</sup>

○「SF小学教則」<sup>(18)</sup>

REGULATION OF PRIMARY SCHOOLS.

### EIGHTH GRADE

Arithmetic—Counting, reading and writing numbers to 100; lessons illustrated by the use of the numeral frame; Roman numerals in connection with the reading lessons; adding small numbers.

Reading—Charts from 1 to 6; First Reader; spelling from the charts and spelling and readers, orally.

writing—Script letters and easy capitals.

Oral lessons —The five senses, their organs and use; common objects; conversational lessons on domestic animals; primary and secondary colors.

Vocal Music—(略) *Mason's National Music Teacher* をテキストに使用。

Time……at least ten minutes, daily.

以上、最下級の分、第8級について対照させたが、教科数だけでなく、その内容についても翻訳といってよいほどの強い類似性をもっている。例えば「師範小学教則」の第8級算術と、「SF小学教則」のArithmeticとで比べてみても、ローマ数字を教えることが入らないものの、100までの数字を読み、書き、数えさせる。the numeral frameを使っての解説（日本では算盤を使用）、簡単な加算を授けるなど、同一の内容となっている。

次に各教科別に、第8級から1級まで、各教則を比較、分析する。

## 4-④ 「読物」(読方・綴字)

「師範小学教則」は、「創定小学教則」よりも「改正小学教則」のほうが進み具合、内容がやや高度になっているが、両者に大きな違いはない。

アメリカ合衆国の教則を互いに比較すると、「PS教則」よりも「PG学校教則」のほうが全体の進行が早い。しかし内容に大差はなく、やや「PS教則」に具体的な教材の指定がみられたりする。

日米で対照すれば、第8級で小学読本第1巻を示しているのが「PG学校教則」と同様である。またウィルソン (Wilson, M.) とカルキンス (Calkins, N.A.) による学校家庭用掛図 (School and Family Charts) は、これをもとに師範学校で各種の掛図が作られたと思われるが、このウィルソン掛図類を使用する点は、全てのアメリカ側教則と共通している。<sup>(19)</sup> 第7級で小学読本を使用することも教材が米国の教則と共通する。第6級「改正小学教則」の読本第3巻は「PG学校教則」と同一である。また「PS教則」第7・6級分が、「師範小学教則」の第8・7級に一致し、日本の教則の方が少し進み方が早くなっていた。さらに6級から教材に地理関係書が加えられたが「PG学校教則」に同級から「地学」があったことが関係していると思える。第3級では「改正小学教則」に早くも歴史関係書が採用されている。「PG学校教則」では第2級から「史学」がある。してみると「読物」については日本の教則の方が少し進んでいたと考えられる。また、地理や歴史などの関係書(他教科のテキスト類)を使用するという方法は、「SF小学教則」にもそういう採用法があったのである。<sup>(20)</sup> このように教材面に関しては、ほぼ翻訳版であったといえよう。

## 4-⑤ 「算術」

「師範小学教則」は、「創定小学教則」、「改正小学教則」の2つとも、内容に大差なく、ほぼ同じである。ただしアメリカ合衆国の教則と比べて、全体的に初歩段階で終わっていて進行が遅かった。それは、当時、和算から洋算への変換時であり当時の子どもたちにとって算術(洋算)が難解であると考えられていたことを示しているといえよう。

米国の教則同士では、「PS教則」と「PG学校教則」の第8級教授内容については、ほぼ一致し共通している。しかし7級以降についての記述内容は違っている。

第8級分は、前述のように「師範小学教則」にアメリカ合衆国の教則からの影響がかなり強くみえる。ちなみに「改正小学教則」には第7級からローマ数字が加えられた。第6級から1級まで、算術のテキストとして小学算術書(ロビンソン算術書)を使用する点で、「PG学校教則」と共通している。このテキスト訳出の原本となった。*Robinson's First Lessons in Mental and Written Arithmetic*は、進歩的なペスタロッcher直観主義思

想に基づいており、当時アメリカ合衆国における最新の算術書が日本へ直ちに輸入されたことになる。しかしそうした最新の教材も、実際にはきわめて注入主義的に用いられたと考えられるが、学校現場において当時どのように用いられたかについてはここでは特に言及はしないこととする。

#### 4-④ 「習字」

「師範小学教則」では、「創定小学教則」「改正小学教則」の両者ともに、ほぼ内容が一致している。

アメリカ合衆国の教則では、互いにその記述に具体的な共通点はない。ただし「P G学校教則」は、筆記体や大文字を書かせるのであるから「P S教則」と同様である。「P S教則」では、エビシ……つまり筆記体や大文字、または数字を書くこととある。つまり「P G学校教則」の部分の書く対象例を示している。また「P G学校教則」では第6級から「習字」は省かれている。この点から「S F小学教則」のWritingは、「改正小学教則」の「書取」にあたるものとも思える。いずれにしても、黒板を使用して手本を示すという教授方法は共通している。

「師範小学教則」とアメリカ合衆国の教則とを比較すると、文字の書き方、文字自体を教えるということでは共通しているが、記述に具体的な共通点はみられない。日本流に文字の教え方をあてはめたのであろう。「師範小学教則」における習字図や習字本といった教材、テキストについては、アメリカ合衆国の教則には示されていない。ただ「S F小学教則」で各学校学級に必ず“Payson and Dunton's Penmanship Charts”を置いて教授することになっていた。<sup>(21)</sup> また師範学校における授業は、「米国の『ABC』を『いろは』に、又庶物掛図の品物を日本品物に代へるといふ如く、悉皆直写主義の教授を行った」<sup>(22)</sup> のであるから、アメリカ式掛図のABCをいろはと例えて教授したという意味において、アメリカ合衆国の教則と大同小異といえる。

#### 4-④ 「書取」

「創定小学教則」、「改正小学教則」の両方ともほぼ同じ内容が示されている。ただし「改正小学教則」では第5級から省かれ、かわりに「作文」が入った。「P G学校教則」の第6級から「習字」が省かれ「文法」が加えられたのに対応している。「P G学校教則」には「書取」の教科名があげられていなかった。

日本と米国とで比較して、「P S教則」第8級の分の掛図4-6が五十音図や単語図であれば、その教材が共通していることになる。また第6級で「P G学校教則」の「文法」

でリーダーを使用するが、その点は「改正小学教則」と共通している。他教科のテキスト類を授業に用いるという様式が、ここでもとりいれられていた。

#### 4-⑥ 「問答」

「師範小学教則」では、地理や歴史関係書の使用が「改正小学教則」の方が1級分早くなっている（読物科と同様）他は大差ない。

アメリカ合衆国の教則間の関係は、第8級はほぼそのまま共通している。7・5級もいくらか共通点がみられるが、6級については完全に別質のものである。全級にわたって掛図類が概要として示されている点で同様であるが、「PS教則」第6級分に限り、「雨、霰、雪、霧、光（以下略）」といった具体的な天候気象、自然現象等を示すものとなっている。

「師範小学教則」と対照すれば、第8級の単語図の内容（諸物の性質や用い方）を通常物と解釈すれば、アメリカ合衆国の教則全てと一致する。ただ米国版教則の色図については、第7級に組み込まれた。その7級では、通常物は日米の全教則に共通し、人体については「PS教則」と、色図については「PG学校教則」と各々一致し、ほぼ影響を等分に受けたとみられる。第6級の形体線度については、「PG学校教則」に平面、線、角度があった。しかし色図はとりいれられていない。「創定小学教則」同級の果物図は、「PS教則」では第5級にあった。「改正小学教則」には地理関係書が加えられたが、読物科に対応して米国側教則に「地学」があったことが影響していると考えられる。「創定小学教則」第5級には「PS教則」の草木が入っているが、「SF小学教則」の「動物及び植物」に一致する。<sup>(23)</sup> 4級以降はアメリカ合衆国の全ての教則に問答はない。前述のように「地学」「史学」があったので教材として、地理問答、歴史事物に関する問答が組み込まれたと考えられよう。

#### 4-⑦ 「復読」及び「体操」

「復読」あるいは「諸科復習」という科目は、前日学んだことを一人ずつ読ませ、復習させる教科である。近世教育の継承ともいえる暗唱を重視して、知識の蓄積を目的とする当時、そのための有効な手段としてとりいれられた。例えば、小倉庫二『小学教方筌蹄』中の「習業時間割付表」によれば、毎日の一時間めの授業として（9時より10時まで）、<sup>(24)</sup>「前日伝ヘタル所ヲ一人毎ニコレヲ読マシメ、畢リテ其次ヲ授ク」とされている。しかしアメリカ合衆国の教則には、「復読」科は設定されていなかった。

「体操」についても「改正小学教則」に「体操図」が教材として示されていたが、前掲

『小学教方筌蹄』時間表によれば一教科というよりも各教科間5分程を利用した業間体操として行われていたことがわかる。また諸葛の前掲『小学教師必携』緒言11項目にあるように、各授業間（放課時）は必ず生徒を外で遊歩させて教師はそれを監視することとあった。

「PS教則」には第7級（第3ノ分）から体操があげられている。また「PG学校教則」にはなかったが、その原本「SF小学教則」には各教科と並べて示されていないものの、教授の総則中に「Physical Exercisesは、各クラス少なくとも1日に2回以上授けること<sup>(26)</sup>」とあり、正課というよりも業間体操であったと考えられる。学校における体操・体育という概念がまだ定着していない当時、体操の導入はまさにアメリカ合衆国教則からの影響によるものであったと考えられる。

#### 4-⑥ 削除された教科

主要教科については、ほぼ全面的にアメリカ合衆国の教則からの影響がみられるが、省略された教科もある。

「PS教則」から「進退」「字韻」「音楽」「図法」が、「PG学校教則」からは「地学」「史学」「語解」「日記」「音楽」が削除されたと思われる。さらに「SF小学教則」からは“Drawing”も省かれた。「進退」「字韻」は教科内容について詳しく分析することができない。「音楽」については「学制」第27章に、唱歌は「当分之ヲ欠ク」<sup>(27)</sup>とあり、当時まだ音楽という教科を維持しうるだけの条件はなかったと思える。また「SF小学教則」でも、“Vocal Music”は毎日10分程度授けるとあり<sup>(28)</sup>、正課でなかった。さらに“Drawing”“Book-Keeping”（簿記、「PG学校教則」では日記となっている）も週に30分から1時間程度、もしくは男児生徒のみなどの変則的な教科であるのでとりいれられなかったと考えられる。「地学」「史学」については「問答」に組み込まれていた。

#### 4-⑦ 教材における影響

以上のように、主要教科数や配列順については、ほぼ同程度であるが幾分「PS教則」に近い。しかし内容の記述については第8・7級については同等の影響を受けているものの第6級以降は明らかに「PG学校教則」との共通点が多い。「PS教則」は原本が不明であり詳細なことはわからないが少なくとも同じ実物教授に基づく教材の入ったカリキュラムといえよう。ある程度「師範小学教則」に影響を与えている。

教材面に関しては「PS教則」「PG学校教則」の両者から強く影響を受けていた。「師範小学教則」にかかげられた教科書は、スコットの新教授法とともに全国へ急速に普及す

る。その内容は近代的な性格をもち、小学校用テキストとしての意図をもって作成されたのが大きな特徴であった。この点において、これらの教科書は、教則とワンセットで編纂されており、近代教科書成立の基礎をなすものとして教科書史上注目すべきものである。

倉沢剛『学制の研究』では、「S F 小学教則」に『ウィルソンリーダー』(Wilson's Readers)、ミッチェルの地理書、ロビンソンスの算術書、グードリッチの合衆国史などの初等教科書が見え<sup>(29)</sup>、日本で翻訳刊行されることになったのは、この「S F 小学教則」に従ったためと説明されている。しかし、これは明らかな誤りであって、「S F 小学教則」と翻訳版の「P G 学校教則」とではテキストが完全には一致していない。例えば「P G 学校教則」で、ウィルソン・リーダー、ミッチェル地理書、グードリッチ合衆国史をあげているが、それに対して「S F 小学教則」では、マクガフィー・エクレクティック・リーダー(McGuffey's Eclectic Reader)、モンテース地理書(Monteith's Introduction)、スウィントン合衆国史(Swinton's Condensed History of the United States)が使われることとなっている。

この差異は何故か。ウィルソン・リーダー等はどこから入ってきたのであろうか。実は「P G 学校教則」にあげられている教材類は、師範学校設立以前に南校教頭 G・H・F・フルベッキが、小学教科書に適するものとして文部省にその採用を進言していたものである<sup>(30)</sup>（明治5年3月）。それを受けて米国へ注文したのが「小学教師教導場ヲ建立スルノ<sup>(31)</sup>伺」時であろう。その後、師範学校へ取り寄せられたこれらアメリカ合衆国のテキストを、「S F 小学教則」訳出の段階であてはめたものと思われる。従って完全なる訳出版とはいえない。ある程度現実を加味する行為があり、翻訳し、テキストを組み入れ、整理されたものが「師範小学教則」である。

## 5. 教授法書との関係

当時の教授法書は、スコットが示した授業の具体的行為を記したものであるが、その教授例の示し方は一様に「師範小学教則」そのままとなっている。例として代表的な教授法書を次にあげる。

諸葛信澄『補正 小学教師必携』(1875年)

読物、算術、習字、書取(5級から作文)、問答、(体操と復読)

筑摩県師範学校編纂『上下 小学授業法細記』(1874年)

読物、復読、書取(5級から作文)、問答、算術、習字

林多一郎『小学教師必携補遺』(1874年)

復読、読物、書取、問答、誦算及解算(算術)、習字、体操略

生駒恭人『小学授業術大意』下、(1876年)

復読、授読、問答、書取、作文、算術、習字

青木輔清編『師範学校 改正小学教授方法』(1876年)

復読、読物、書取(5級から作文)、算術、習字、業間体操、問答法

金子尚政訳 高橋敬十郎編『小学授業必携』(1875年)、慶林堂

「此書ノ順序ハ一ニ東京師範学校頒布ノ小学教則ニ基ク(略)」

ほとんど教科の示し方は「師範小学教則」に従っている。また例えば前掲『小学教師必携』第7級「算術」で、ローマ数字が入り、「問答」6級から地理初歩のテキストが入るなど、「改正小学教則」から教材とその使用まで一致している。教授法についても教則そのままが多く、大きくその範囲を越えるものではない。問答法の具体例や、例として掛図類をつけ合わせた内容となっている。

## 6. おわりに

スコットの伝えた教授法を検討するために、本稿では師範学校制定による小学教則についてみてきた。スコットの教授論の内容については、彼自身が体系的な論説を残していないので詳細にはわかりにくい。ただ彼によって伝えられた教授法は当時アメリカ合衆国で台頭していたオブジェクト・レッスンであり、その特質は「問答」教授の法であった。近代学校制度への転換により、個別指導から一斉教授へ形態が変えられていく。多量の教材を多数の子どもたちに、少ない費用をもって効率的に教授するには一斉教授法は不可欠だったといえる。初期の一斉教授では暗記による知識の蓄積が目的とされた点において注入主義がその方法原理となっていた。オブジェクト・レッスンもその本来の志向から離れて、注入主義的なベースをもって、単に示教方式を変更したに過ぎない場合があった。近代化を開始した当時の学校においては、一般にいかに見えるかよりも、何を教えるかが問題とされていた。教材論、教育内容にかなりの重点が置かれていた。スコットの教授には限界があったものの、当時この教授方法が唯一の近代的方法として、卒業生や教授法書を通して各府県へと普及されていった(この普及過程の実状については、さらに実証的研究を深める必要がある)。そして新しい教育内容、教材の入った師範学校の小学教則が、教授論上において注目されるのであった。

本稿の考察によれば、アメリカ合衆国(特にサンフランシスコ)の教則が原本となり、翻訳・整理されて師範学校附属小学教則が成立し、その教則に合わせて実際の授業がおこなわれ教員養成が進められたと考えられる。また教科書・教具も、この原本に合わせて訳出・準備され、教授法書も教則に従って著された。この点において、スコットはまさに日

本近代教育の実質的パイオニアであったといえる。

〔注〕

- (1) 「公文録」文部省之部 壬申自四月至五月、文書25 小学教師教導場ヲ建立スルノ  
同
- (2) 同前書、及び「公文録」文部省之部 壬申自八月至九月、文書 9
- (3) 代表的なものとして、仲新・稲垣忠彦・佐藤秀夫編『近代日本教科書教授法資料集  
成』東京書籍、1982年（第1巻、教授法書1）がある。
- (4) 日本科学史学会『日本科学技術史大系』第8巻（教育1） 第一法規、1964年、板倉  
聖宣氏執筆第5章、「学制」と科学の普通教育の制度化
- (5) 同前、板倉氏の発見による。筆者は学習院大学図書館にて閲覧した。
- (6) 倉沢剛『学制の研究』 695頁より、学習院大学図書館所蔵資料
- (7) 坪井玄道「創業時代の師範教育」国民教育奨励会編纂『教育五十年史』民友社、1923  
年、19頁
- (8) 辻新次「師範学校の創立」、茗溪会『教育』第344号、28～29頁所収。
- (9) Scott, M.M. "Education in Japan", *the Hawaiian Monthly*, Nov. 1884, 国立教育  
研究所佐藤秀夫氏の収集資料による。
- (10) 諸葛信澄『小学教師必携』烟雨楼、1873年（諸言2項目）
- (11) 金子尚政訳 高橋敬十郎編『小学授業必携』慶林堂、1875年
- (12) 前掲『小学教師必携』
- (13) 同前書
- (14) 附属小学校設置以前にも助教制度方式で同様の実践はあった。
- (15) 『自第一学年至第六学年 東京師範学校沿革一覽』復刻版、第一書房、1981年、（附  
録）に基づいて表を作成した。
- (16) 学習院大学図書館所蔵資料。教科順を師範学校小学教則にそって並べた。
- (17) 前に同じ。学習院大学図書館所蔵資料。
- (18) *Rules and Regulations of the Public Schools of the City and County of San  
Francisco*, 1871. (学習院大学図書館所蔵資料) pp.36-7. (以下、*Rules and Regula-  
tions* と略記する。)
- (19) ウィルソン掛図1～6番と、日本語版の単語、読方、連語図らの対応について調査  
する必要がある。
- (20) 例えば、*Rules and Regulations* ; *op. cit.*, p.46

- (21) *Ibid.*, pp.48-9
- (22) 辻新次「学制々定当時」,『教育時論』第982号(学制頒布満40年記念)1912年, 13頁
- (23) *Rules and Regulations ; op. cit.*, p.39
- (24) 小倉庫二編輯『小学教方筌蹄』全二冊, 1875年, 小倉氏蔵版
- (25) 同前書
- (26) *Rules and Regulations ; op. cit.*, p.36
- (27) 教育史編纂会『明治以降 教育制度発達史』第1巻, 284頁
- (28) *Rules and Regulations ; op. cit.*, p.36
- (29) 前掲『学制の研究』702頁
- (30) 「含要類纂卷之卅三 本省往復之部」明治5年正月から11月, (東京大学 百年史史料室所蔵)
- (31) 前掲「公文録」壬申自四月至五月, 文書25